



青いジャージの思い出

これは、とある音楽大学の卒業生が、歌うことと生きることにいろいろと絶望して、歌うのをやめて新しいことを始めるつもりで入ったメディアアートの学校で、なぜか卒業時には永遠に響く旋律を歌う少年役をすることになっていた・・・という夢を見たような話です。

たしか1998年か1999年のことです。たぶんイベントの空き時間の前後とかだったと思います。名古屋の栄の商店街を、三輪真弘先生と私は歩く機会がありました。当時IAMASにあった仮眠室とゼミ室を行き来するばかりだった私は、久しぶりに来た街の雰囲気やや浮かれていたかもしれません。リリースされたなりの「ダンスダンスレボリューション」を見かけ、三輪さんを待たせて音ゲーで遊ぶお時間をいただいたのです。しかも三輪さんにも一緒にやりませんか?と、聞きました（断られました）。

それから、古着屋に寄り、青いジャージ（たしか千円）に一目惚れして購入しました。その様子をそばで見ていた三輪さんは「な、なぜそれを買うの・・・!」と、なんだか驚いているようでした。明るい青色で、腕には2本の白いストライプ。まるで中学の体育着のようで、もしかすると、当時頭髪1センチぐらいだった学生が着用するその光景に、少年Aの姿がリアルに浮かんだのでしょうか。

「モノローグ・オペラ《新しい時代》」の準備段階として出演した「《新しい時代》ふたりのオルガニストとメガホンを持ったアシスタントのための」（1999、新宿文化センター）は、私にとってソプラノ歌手として出演料をいただいて舞台に立たせてもらう初めての機会となり、超絶に緊張していたのを覚えています。パイプオルガンの音色ストップレバーを動かすアシスタントをしながら、突如メガホンをもって歌いだすという設定でした。衣装の指定はあの青いジャージでした。

さかいいいしう